学位論文　要約

# 「語り直す力」を育てる文学教育の構想
## ―小学生を中心に―

広島大学大学院　教育学研究科　博士課程後期
学習開発専攻　カリキュラム開発分野

佐々原　正樹

2015

# 論文構成


**序章** ―――――――――――――――――――――――――――――――― 1

**1　問題の所在** ―――――――――――――――――――――――――――― 1

**2　研究の目的と方法** ―――――――――――――――――――――――― 1

2-1　研究の目的 ---------- 1

2-2　研究の方法 ----------

2-2-1　各部の構成

2-2-2　各章の研究の方法

**Ⅰ部　理論的研究**

**第1章　「語り直す力」育成の必要性とその捉え直し** ―――――――― 4

**1　「語り直す力」育成の必要性** ―――――――――――――――――― 4

1-1　学習指導要領と「生きる力」 ---------- 4

1-2　「生きる力」「キー・コンピテンシー」 ---------- 5

1-3　「語り直す力」育成の必要性 ---------- 7

1-3-1　学習指導要領の「生きる力」の問題点

1-3-2　DeSeCo プロジェクトと「思慮深さ/省察力」(reflectiveness/reflectivity)

1-3-3　メタ認知の変容

**2　方法論としてのナラティブ** ―――――――――――――――――― 10

2-1　ナラティブの定義 ---------- 11

2-2　ナラティブの概観 ---------- 12

2-2-1　「物語」から「語り」へ

2-2-2　研究方法としてのナラティブ

2-2-3　臨床分野における実践方法としてのナラティブ

2-2-4　「語り」から「語り直し」へ

2-3　ナラティブを理論的枠組みとする意義 ---------- 19

**3　「語り直す力」の捉え直し** ―――――――――――――――――― 20

3-1　自己物語論 ---------- 20

3-2　「自己物語」の特徴 ---------- 21

3-3　自己を「物語」として捉えるよさ ---------- 22

3-4　「自己の語り直し」から「自己物語の語り直し」へ ---------- 24

**第2章　「語り直す力」を育成するための理論構築 1 ―――――― 26**

**―ナラティブ・アプローチを検討して―**

**1　人生において語り直しが生じる時 ―――――――――――――― 26**

1-1　出来事と「自己物語」のズレ(タイプ 1 のズレ) ---------- 26

1-2　「自己物語」と「外部の物語」のズレ(タイプ 2 のズレ) ---------- 27

**2　内部で起こっているズレ　出来事と出来事のズレ ―――――――― 28**

**3　「自己物語」の語り直し　―ナラティブ・アプローチを援用して― ――――― 29**

3-1　基本的な考え ---------- 29

3-2　「位置づけられた場」の「権力関係」に注目して ---------- 29

―出来事と「自己物語」のズレ(タイプ 1 のズレ 0.)の場合を事例に―

マイケル・ホワイト，デビット・エプストン

3-3　「語られた場」の「権力関係」に注目して ---------- 31

―「自己物語」と「外部の物語」のズレ(タイプ 2 のズレ)の場合を事例に―

3-3-1　ハロルド・グ―リシャン，　ハ―レ―ン・アンダ―ソン

3-3-2　トム・アンデルセン

3-4　「相互作用」と「道具」に注目して ---------- 37

―「自己物語」と「外部の物語」のズレ(タイプ 2 のズレ)の場合を事例に

「定義的祝祭」　マイケル・ホワイト

3-5　ナラティブ・アプロ―チから得られた知見 ---------- 41

3-6　総合考察 ---------- 48

**第3章　「語り直す力」を育成するための理論構築 2 ―――――― 48**

**―「語り直す力」を育てる文学の授業の理論構築―**

**1　「語り直す力」育成の視点からみた先行研究の検討 1 ―――――― 48.**

**―ナラティブ・アプローチから得られた知見を教育に援用する際の課題―.**

1-1　教育学とナラティブ・アプロ―チの共通点 ----------48

1-2　ナラティブ・アプロ―チから得られた知見を教育に援用する際の課題---------- 49

1-2-1　「揺らぎ」「ズレ」を生じさせるこのとの必要性

1-2-2　教育における非対称性を乗り越えることの必要性

1-3　公共性と他者 ---------- 52

1-3-1　時代が抱える「困難性」を乗り越える必要性
1-3-2　子どもを「他者」とみる
**2　「語り直す力」育成の視点からみた先行研究の検討 2** ―― 55
2-1　綴り方・生活綴り方の検討 ---- 55
2-2　文学教育の検討 ---- 58
2-2-1　二つの軸
2-2-2　四つの実践・理論の特徴と課題
**3　文学教育と「語り直す力」の育成** ―― 76
3-1　国語科教育と物語的行為 ---- 76
3-2　なぜ，文学教育で「語り直す力」を育成するのか ---- 78
3-2-1　なせ，文学作品を媒介とするのか
**4　「語り直す力」を育てる文学の授業の理論構築** ―― 82
4-1　「語り直す力」を育てる文学の授業の理論 ---- 82
―「作品世界」の「聴き手」と「現実世界」の「読み手」を接続するために―
4-1-1　文学体験を起こすための授業理論　【課題①，課題⑥を乗り越えるために】
4-1-2　「脱中心化」【課題②，課題③を乗り越えるために】
4-1-3　自己を生成過程の「物語」と捉えることで【課題④，課題⑤を乗り越えるために】
4-1-4　学習者に「現実世界」と「作品世界」をどのように接続させるか【課題⑥】
【課題⑥を乗り越えるために】
4-2　「語り直す力」を育てる文学の授業について---- 94
4-3　「語り直す力」について ---- 94
**Ⅱ部　実践的研究**
**第4章　「語り直す力」を育てる文学の授業理論の検証** ―― 97
**～中学年を事例として～**
**1　「語られた場(教室という場)」と「登場人物の自己像・世界像」の語り直し** ―― 97
1-1　**実験授業1** ---- 97
「引用」方略を導入した授業の特徴，及びが「引用」方略が「登場人物の自己像・世界像」の語り直しに及ぼす効果の検討
1-1-1　はじめに
1-1-2　方法

1-1-3　結果と考察
1-1-4　総合考察
1-2　**実験授業2** ---------- 120
「引用」方略の継続が「聴くこと・発言形成」に関わる方略の習得，及び，「登場人物の自己像・世界像」の語り直しに及ぼす効果の検討
1-2-1　はじめに
1-2-2　方法
1-2-3　結果と考察
1-2-4　総合考察
**2　「道具」,「コミュニケーション過程」と「登場人物の自己像・世界像」の語り直し** － 150
2-1　**実験授業3** ---------- 150
「対話的ディスカッション」と「他者モニタリング」との関係，及び「対話的ディスカッション」の「語り直し」に及ぼす効果の検討
2-1-1　問題の所在
2-1-2　目的と方法
2-1-3　授業の結果
2-1-4　社会的過程の「メタ認知」を考慮した「語り直す力」を育てる文学の「読み」の授業
2-1-5　総合考察
2-2　**実験授業4** ---------- 167
集団で形成された「外部の物語」が立ち上がる状況の中で，「対話的ディスカッション」の「語り直し」に及ぼす効果の検討
2-2-1　問題の所在
2-2-2　「解釈の偏り」を形成するしくみ
2-2-3　「解釈の偏り」を前提とした授業の構想
2-2-4　総合考察
**3　「位置づけられた場(言論の場)」と「読み手の自己物語」の語り直し** ――― 182
3-1　**実験授業5** ---------- 182
言論の場の変化が「読み手の自己物語」の語り直しに及ぼす効果の検討
3-1-1　問題の所在
3-1-2　「読み」の語り直しを形成するしくみ

2-1-3　「語り直す力」を育てる授業の構想と実際
3-1-4　総合考察
**第5章　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想** ―――― 196
**1　低学年・中学年・高学年の到達目標** ―――― 196
1-1　文学体験の発達 ---------- 196
1-2　三つの視点と発達段階 ---------- 199
1-2-1　コミュニケ―ション過程と発達段階
1-2-2　道具と発達段階
1-2-3　場と発達段階
**2　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想　―低学年** ―――― 204
2-1　低学年の「語り直し」体験 ----------204
2-1-1　「入る過程」→「なる過程」
2-2　三つの視点　〈コミュニケ―ション過程〉〈場〉〈道具〉 ---------- 207
2-2-1　〈コミュニ―ケション過程〉
2-2-2　〈場〉
2-2-3　〈道具〉
2-3　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想 ---------- 208
―　教材「ニャ―ゴ」（２年）　を事例に―
2-3-1　教材について
2-3-2　目標について
2-3-3　指導の工夫について
2-3-4　指導計画について
**3　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想　―中学年（3年生）―** ―――― 214
3-1　中学年（３年生）の「語り直し」体験 ---------- 214
3-1-1　「入る過程」→「なる過程」→「みる過程」
3-2　三つの視点　〈コミュニケ―ション過程〉〈場〉〈道具〉 ---------- 216
3-2-1　〈コミュニ―ケション過程〉
3-2-2　〈場〉
3-2-3　〈道具〉

3-3　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想 ---------- 218
— 教材「おにたのぼうし」（３年）を事例に—
3-3-1　教材について
3-3-2　目標について
3-3-3　指導の工夫について
3-3-4　指導計画について
**4　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想　—中学年（4年生）—** ——— 227
4-1　中学年（４年生）の「語り直し」体験 ---------- 227
4-1-1　「入る過程」→「なる過程」→「みる過程」→（イメ—ジ化）→「引き出す過程」
4-2　三つの視点　〈コミュニケ—ション過程〉〈場〉〈道具〉 ---------- 228
4-2-1　〈コミュニ—ケション過程〉
4-2-2　〈場〉
4-2-3　〈道具〉
**5　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想　—高学年—** ———— 231
5-1　高学年の「語り直し」体験 ---------- 231
5-1-1　「入る過程」→「なる過程」→「みる過程」
（イメ—ジ化）→「引き出す過程」→「意味づける過程」
5-2　三つの視点　〈コミュニケ—ション過程〉〈場〉〈道具〉 ---------- 233
5-2-1　〈コミュニ—ケション過程〉
5-2-2　〈場〉
5-2-3　〈道具〉
5-3　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想 ---------- 237
— 教材「海の命/海のいのち」（６年）を事例に—
5-3-1　教材について
5-3-2　目標について
5-3-3　指導の工夫について
5-3-4　指導計画について

**終章　本研究の成果と課題** ―――― 248
**1　成果** ―――― 248
1-1　「語り直す力」育成の必要性　及び「語り直す力」の捉え直し(目的 1) -------- 248
1-2　「語り直す力」を育てる文学の授業の理論構築　(目的 2) ---------- 248
1-3　「語り直す力」を育てる文学の授業理論の有効性の検証　(目的３) ---------- 249
1-4　「語り直す力」を育てる文学の授業の構想　(目的４) ---------- 250
**2　課題** ―――― 250
2-1　理論の精緻化 ---------- 250
2-2　「中学・高校生における「語り直す力」の育成 ---------- 251
2-3　「語り直す力」を育てる授業と読書教育 ---------- 251
**参考文献** ―――― 252
**謝辞**

# 序章　研究の目的と方法

## 1 問題の所在

中央教育審議会答申は2008年１月に，「次代を担う子どもたちに必要な力を一言で示すとすれば，まさに平成８年(1996)の中央教育審議会答申で提唱された「生きる力」にほかならない」(中央教育審議会　2008，pp. 9-10)と述べている。日本の教育は「生きる力の育成」を目指している

一方，OECD(経済協力開発機構)は，1997年から2003年にかけて，「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な能力を，「主要能力(キー・コンピテンシー)」として定義付け，国際的に比較する調査を開始した(中央教育審議会　2008)。キー・コンピテンシーで定義・選択された新しい学力観・能力観は，世界に影響を与えつつある。

キー・コンピテンシーは三つのカテゴリーに分類されているが，そのキー・コンピテンシーの三つのカテゴリを結び付ける中核とされているのが「思慮深さ/省察力(reflectiveness，OECD 2005，p.8 /reflectivity OECD 2003 p.184) )」である。「思慮深さ/省察力」とは「メタ認知的スキル，批判的なスタンスの確保や創造的な能力を活用する」(ライチェン& サルガニク　2006，p.208)という思考や行為を意味する。筆者は，この「思慮深さ/省察力」は，これからの変化に富む時代を生きていくために不可欠な能力と考える。この力の育成のための研究が急務と考える。しかし，「思慮深さ/省察力」は，以下の点で不十分と考える。

自己や世界の認識は，「私という目」を通して行われる。その認識の背後には，それを支えている「自己像・世界像」がある。私が認識したものを批判的に検討し，新たな考えを創造するだけでは不十分と考える。その考えを背後で支えている自己像・世界像をも相対化し，批判的に検討し，新たな自己像・世界像を再構築する力が必要と考える。つまり，自己の認識の背後にある自己像・世界像を語り直す力が必要と考える。

そこで，筆者は，「思慮深さ/省察力」を「自己の考え及びその背後にある自己像・世界像(自己)を相対化し，批判的に検討し，新たな自己像・世界像(自己)を再構築する力」と捉え直すことを主張する。そして，そのような力を「語り直す力」と呼ぶ。

このような「語り直す力」は「生きる力」に繋がる力である。「語り直す力」の育成を探究することは，極めて重要な課題と考える。

## 2　研究の目的と方法

### 2-1　研究の目的

以上の問題意識を受けて，本研究の目的を次の四点に設定する。

１）「語り直す力」を育成することの必要性を論じ，育成するためには，「語り直す力」をどう捉えればよいかを明らかにする。（第１章）

２）「語り直す力」の育成は，文学教育で行うべきことを論じ，その上で，「語り直す力」を育てる文学の授業の理論を構築する。（第２・３章）

３）授業実践を行い，授業理論の有効性を検証する。（第４章）

４）授業実践から得られた実践的な知見，及び，残された課題の考察を進め，理論の修正を行い，「語り直す力」を育てる文学の授業を構想する（５章）

### 2-2 研究の方法

#### 2-2-1　各部の構成

難波(1999)は，研究アプローチを没価値的な因果論に基づく実証的アプローチと価値的な目的論に基づく実践的なアプローチの二つに整理し，両者が出会う場として，国語科教育研究を位置づけている。そして，記述・説明研究→実践研究という道筋を示している。

本論文では，難波(1999)を援用し，論文を二部構成とする。第Ⅰ部では，ナラティブを理論的枠組として援用し，「語り直す力」を育てる文学教育について理論構築を行う。理論構築のための方法としては，特定の分野の事例研究をサンプルとし理論化し，それを他の分野に援用し理論を修正していく方法である。

第Ⅱ部では，一部で得た理論的成果をもとに，授業実践を行い，理論の妥当性，信頼性を検証する。さらに，得られた実践的な知見，及び，残された課題の考察を進め，「語り直す力」を育てる文学教育の実践を構想する。ここでの授業実践の検証では，授業記録の談話（語り）及び感想文（ノートも含む）等を研究対象とし，量的及び質的手法で分析する。

実践者が自らの授業を対象に研究を行う意図は，授業実践の豊かさと複雑さを捉えるためには，研究者の外側の目からだけでなく，実践者の内側の目から捉えることが必要であり(Lampert 2000)，そうすることでより実践を豊かにし，より多くの教師や児童に貢献できると考えたからである。

同時に，そのことは，実践者の主観的な解釈に陥る可能性も持っており，分析の妥当性，信頼性を確保することが重要である。事例分析に関しては，厳密性と妥当性を保証するために，相互主観性と解釈可能性を担保することが指摘されている(南 1991)。そこで，事例分析では，上記の点を踏まえ，(a)課題や授

業展開，(b)教師の意図や児童への判断，(c)学習者に関する情報の三点を明示した。

### 2-2-2 各章の研究の方法

#### (1) 第1章の方法

第１章の目的は，「語り直す力」を育成することの必要性を論じ，その力を育成するためには，「語り直す力」をどう捉えればよいのかを明らかにすることである。そこで，第１節では，「生きる力」を育てるためには，キー・コンピテンシーの核心である「思慮深さ/省察力」を拡張した「語り直す力」の育成が必要であることを論じる。続いて，第２節では，ナラティブ(narrative)に関する研究を概観した上で，「語り直す力」育成のための理論的枠組みとして，ナラティブに依拠することの有効性を明らかにする。第３節では，ナラティブを援用し，自己を「物語」と捉え，「自己(自己像・世界像)を語り直す力を育成すること」を，「自己物語を語り直す力を育成すること」と捉えればよいことを論じる。

#### (2) 第2章の方法

第２章の目的は，ナテラィブ・アプローチによる「自己物語」の語り直しの実践及び理論を考察することによって,「語り直す力」を育てる文学の授業を構想するための知見を明らかにすることである。そのために，まず，第１節では，人生において，「自己物語」の語り直しを必要とする場面を考察し，語り直しが起こる条件を示す。次に，第２節では，「自己物語」の語り直しが起きる時，学習者の内部では何が起こっているのかを示し，「自己物語」の語り直しが起こる過程を明らかにする。第３節では，ナラティブ・アプローチにおいて，「自己物語」の語り直しが具体的にはどのような方法で進められているのを考察する。第４節では，そこでの考察をもとに，「語り直す力」を育てる文学の授業を構想するための知見を明らかにする。

#### (3) 第3章の方法

第３章の目的は，先行研究の知見及び課題を踏まえ，「語り直す力」を育てる文学の授業の理論を構築することである。そのために，まず，第１節では，ナラティブ・アプローチから得られた知見を教育に援用する際の課題を明らかにする。第2.節では，「語り直す力」育成の視点から，国語教育の先行研究を検討し，課題を明らかにする。第３節では，「語り直す力」育成をなぜ，文学教育で行うのかを論じる。第4.節では，先行研究の知見及び課題を踏まえ，「語り直す力」を育てる文学の授業の理論を構築する。

### (4) 第4章の方法

第 4 章の目的は，第 3 章で構築された理論の有効性を検証することである。大きく二つに分けて検証する。第 1 節から第 2 節では「作品世界」の「登場人物の自己像・世界像」の語り直しを，第 3 節では，「現実世界」の「読み手の自己物語(自己像・世界像)」の語り直しを，研究対象とする。具体的には，第 1 節から第 2 節では，「教室という場」「コミュニケーション過程」「道具(教材)」の変化が「作品世界」の「登場人物の自己像・世界像」の語り直しに及ぼす効果を検討する。第 3 節では，「言論の場」の変化が「学習者の自己物語(自己像・世界像)」の語り直しに及ぼす効果を検討する。

### (5) 第5章の方法

第 5 章の目的は，第 4 章の授業実践から得られた実践的な知見，及び，残された課題の考察を進め，「語り直す力」を育てる文学の授業を構想することである。そのために，第 1 節では，第 4 章で得られた知見及び発達段階に関する先行研究をもとに，「語り直し」体験，三つの視点〈コミュニケーション過程・場づくり・道具〉における各学年の到達目標を示す。第 2 節から第 5 節では，小学校の低学年，中学年，高学年，の発達段階に応じた授業構想モデルを示す。

## 第1章 「語り直す力」育成の必要性とその捉え直し

第１章の目的は，「語り直す力」を育成することの必要性を論じ，その力を育成するためには，「語り直す力」をどう捉えればよいのかを明らかにすることであった。

第１章では，以下のことを明らかにした。まず，1)「生きる力」を育成するには，「思慮深さ/省察力」の育成が必要あること，だが，2)「思慮深さ/省察力」概念には，メタ認知の変容が省察の対象とされていないこと，そこで，3)「思慮深さ/省察力」を「自己の考え及びその背後にある自己像・世界像(自己)を相対化し，批判的に検討し，新たな自己像・世界像(自己)を再構築する力」と捉え直し，そのような「語り直す力」の育成が必要であること，である。

次に，ナラティブ(narrative)に関する研究を概観し，特徴と機能を考察した。その結果，以下のことが示唆された。4) 「語り直す力」を育成するための理論的枠組みとして，ナラティブに依拠することの有効性，また，5) ナラティブを援用し，自己を「物語」と捉えることにより，語り直すことで，新たな自己像・世界像が立ち上がり，「自己(自己像・世界像)を語り直す力」を，「自己物語を語り直す力」と捉えればよいこと，である。

## 第2章 「語り直す力」を育成するための理論構築1
## —ナラティブ・アプロ—チを検討して—

第２章の目的は，「ナテラィブ・アプロ—チ」による「自己物語」の語り直しの実践及び理論を考察し，「語り直す力」を育てる文学の授業を構想するための知見を得ることであった。そのために，四つのナラティブ・アプロ—チ(①ホワイト・エプストン(1990，1992) ;②アンダ—ソン・グ—リシャン(1997)；③アンデルセン(2001)；④ホワイト(2000，2004,2009)の実践事例を検討した。その結果，以下のことが明らかになった。

1) 「自己物語」を語り直すためには，二つの過程を必要とすることが示唆された。

① 〈出来事と「自己物語」とのズレ＝タイプ 1 のズレ〉，〈「自己物語」と「外部の物語」とのズレ＝タイプ 2 のズレ〉を媒介にし，自己物語の機能不全や揺らぎを生み，内部に「亀裂」や「裂け目」(出来事と出来事のズレ)が生じる過程。

② ①で生じた〈出来事と出来事のズレ〉を媒介にし，そのズレを克服しようとして，「自己物語」の語り直しが起きる過程。

2) 「自己物語」に回収されていない出来事や経験(ユニークな結果，語ろうとして語れなかった

出来事・経験)に注目し，それらを引き出し意味づけ直すことで，新たな物語が立ち上がることが示唆された。

3) 「自己物語」の語り直しには，次の三つの影響を受けることが示唆された。

A 場 ：「語りが作られた場」の権力性

・時代や文化の権力性

「語られる場」の権力性

・教室という場の権力性

B 場におけるコミュニケーション過程

C 媒介とする道具

4) 「他者の物語」を一つの「**道具**」とし，四つの〈**コミュニケーション過程**(「表現，イメージ，共鳴，忘我)」〉を経ることで，語り直しが起こることが示された。

① 表現等から心が揺さぶられた出来事を語る。(**表現**)

② 一番心を動かされた表現によって喚起されたイメージを語る。(**イメージ**)

③ 自分の人生経験という文脈の中に位置づけ，思い出した出来事や経験(個人的経験)を語る。(**共鳴**)，

④その個人的経験によって，どこへ連れていかれたかを語る。(**忘我**)

## 第3章 「語り直す力」を育成するための理論構築 2
## —「語り直す力」を育てる文学の授業の理論構築—

第３章の目的は，第２章で得られた先行研究の知見及び課題を踏まえ，「語り直す力」を育てるための文学の授業の理論を構築することであった。そのために，まず，ナラティブ・アプローチから得られた知見を教育に援用する際の課題，さらに，「語り直す力」育成の視点から，国語教育の先行研究の課題を明らかにした。以下の六つの課題が明らかになった。

【先行研究の検討から得られた課題】

1) 子どもの内部に「揺らぎ」「ズレ」を生じさせることの必要性**【課題①】**

2) 教育における非対称性という「教育関係」を乗り越える必要性**【課題②】**

3) 「大きな物語」に立ち戻るのでもなく，ただ「小さな物語」に埋没するのでもない，新たな道を模索しなければならないという「困難性」。この時代が抱える「困難性」を乗り越える必要性**【課題③**

4) 自己を動的な「生成する（構成する）自己」と捉えることの必要性**【課題④】**

5) 時代や文化は，教師に影響を与え，教室に，一つの「物語」を形成してしまう。作られた「教室の物語」は，一つの権力として学習者の思考を制限する。学習者は，無意識にその制限された枠組みの中である語りや表現をしてしまう課題を乗り越える必要性**【課題⑤】**

6) 「作品世界を体験した学習者」と，「現実世界の自己物語を語り直す学習者」とを，接続させることの必要性**【課題⑥】**

次に，先行研究の知見及び課題を踏まえ，「語り直す力」を育てるための文学の授業の理論を構築した。「五つの過程」と「三つの視点」を提示した。以下に示す。

【五つの過程】 **「課題①，課題⑥」**

(1) 入る過程→(2)なる過程(他者理解)→(3)みる過程→(4)引き出す過程→(5)意味づける過程

【三つの視点】

○ 「場」・・〈位置づけられた場〉 ・時代や文化の権力性 **「課題②，課題⑤」**

・・〈語られた場〉 ・教室という場の権力性，・時代や文化の権力性

○ 〈コミュニケーション過程〉・ 権力性を弱める手続きとして，**「課題③」**

1)指名権を学習者に移す， 2)「引用」方略の導入

○ 「道具」・・・教材，教師の物語，学習者の物語

【自己物語】ナラティブを援用し，自己を「物語」と捉える**「課題④」**

【五つの過程の概要】

1) (1)から(3)は，「現実世界」の学習者は，「作品世界」に入り，「物語」の聴き手として「作品世界」を体験することになる。

2) 「なる過程」。他者の視点をくぐりぬけることで，登場人物や語り手を自分の枠組みから読まないようにする。「行為→意味づけ」「意味づけ→行為」過程を推論する。なぜならば，人は「出来事を筋立てることで意味づけ」，「意味づけに反応して，次の行為をする」からである。

3) 「みる過程」。「○○になった私」から少し距離を置いて，もう一人の私が「○○になった私」を「みる」ことになる。ここでは，評価や批判だけにならないようにする。そうなった場合， 登場人物や語り手を自分の枠組みだけから捉えてしまい，「揺らぎ」「ズレ」が生じなくなってしまう。

4) 「作品世界」の私と「現実世界」の私を繋ぐために，「作品世界」の出来事から感じたイメージを大事にする。そのイメージに名前をつけ，そのイメージをもとに，「引き出す過程」へと繋がるよ

うにする。

5) 4)から 5)では，「現実世界」に戻った学習者は，「自己物語」の「語り手」であると同時に，「読み手」として，自身の「物語」を「作品世界」で体験した新たな視点で読み直すことになる。

6) 「引き出す過程」。「文学体験をした私」と「そうでない私」が対話をする。「文学体験をした私」は，文学体験で獲得した視点から，自分の経験を捉え直すことが可能となり，「未だ語られぬ」出来事を発見し，引き出すことになる。

7) 「意味づける過程」。新たに引き出した出来事によって，どこに連れて行かれるかを考える。つまり，出来事の意味づけをすることになる。終末を設定し，新たに引き出した出来事・今までの出来事を筋立て，新たな「物語」を立ち上げることになる。

# 語り直しの五つの過程と三つの視点

位置づけられた場

道　具

作品の「聴き手」として

作品世界

1.　「入る過程」

2.　「なる過程」 他者理解

・「行為の風景」「意識の風景」を推論し，登場人物，語り手の理解

3.　「みる過程　」

・語られた表現から心が揺さぶられた出来事を語る(表現)

「脱中心化」

●他者を「異質な，わからない者」とみなし，その「わからなさ」を抱えたまま過ごす)」こと

●自分自身の個人的文脈に沿って「感じたこと・気付いたこと」を述べる，

●そのことが，ただ個人的文脈から生まれたものではなく，「他者の語り」との繋がりの中で生成されたことを述べる，「脱中心化」

一番心を動かされた表現によって喚起されたイメージを語る

イメージ

コミュニケーション過程

自己物語「読み手」として

現実世界

4.　「引き出す過程」

・自分の人生経験という文脈の中に位置づけ，思い出した出来事や経験(個人的経験)を語る(共鳴)。

5.　「意味づける過程」

・その個人的経験によって，どこへ連れていかれたかを語る(忘我)。

●1.2.3.は，「作品世界」の他者の視点(登場人物，語り手)を自分の中に取りこみ，「私の中の他者」と「私」との自己内対話を生じさせるための手続きである。それに対して，4.5.は，「文学体験」を媒介に，「文学体験をした私」の視点を自分の中に取りこみ，「私の中の『文学体験をした私』」と「今までの私」との自己内対話を生じさせるための手続きである。

語られた場

## 第4章 「語り直す力」を育てる文学の授業理論の検証
## ―中学年を事例として―

第４章の目的は，第３章で構築された理論の有効性を検証することであった。五つの実験授業を行った。大きく二つに分けて検証した。一つは，「教室という場」「コミュニケーション過程」「道具(教材)」の変化が「作品世界」の「登場人物の自己像・世界像」の語り直しに及ぼす効果を検討した。もう一つは，「言論の場」の変化が「学習者の自己物語(自己像・世界像)」の語り直しに及ぼす効果を検討した。その結果，以下のことが明らかになった。1)〈教室の場〉の権力性を弱めること，対話的コミュニケ―ションの活用及び学習者の「内部の物語」を揺さぶる教材が，「登場人物の自己像・世界像の語り直し」に有効であることが示された。さらに，2) 「言論の場」の変化が，「作品世界」の読みを深め，「自己物語の語り直し」に有効であることが示された。

具体的には，実験授業１，実験授業２において，教室の権力を弱めるために導入した，「引用」方略及び，指名権を児童に委託した結果，以下のような特徴ある話し合いが「登場人物の自己像・世界像」の語り直しに影響を与えることが示された。

1) 他者の発話を引用し，質問を中心に構成され，解釈過程を交流する話し合い。例)「どこからそう考えたのですか」「そこからどう考えたのですか」
2) 疑問や自分の考えを提示し，相手の応答を引き出す話し合い。例)「・・と言いましたね。でも，私は・・と考えますが，これについてどう思いますか」

このような「対話的ディスカッション」(上記のような話し合いを「対話的ディスカッション」と呼ぶことにする)が，「登場人物の自己像・世界像」の語り直しに有効である可能性が示された。そこで，さらに，「対話的ディスカッション」がどの程度有効なのかを検討することにした。実験授業３，実験授業４を行う。その結果，以下のことが示された。

1) 「対話的ディスカッション」において，「なる過程(質問を通し，相手を理解しようとする)」→「みる過程(自分の反対意見を述べる時も，相手の応答を引き出そうとする)」の順で行うことで，他者モニタリングが促進すること。
2) そのことが，「登場人物の自己像，世界像」の見直しに繋がること。

文学体験と同じように，「みる過程」の前に，「なる過程＝他者理解」をしっかり行うことが，重要と考えられる。

さらに，実験授業４では，多くの児童が同じような枠組みで読みやすい(教室における解釈の偏り)状況・文脈において，対話的ディスカッションの効果を検討した。その結果，一定の成果を示した。

同時に，それだけでは，説明できない現象も生まれた。教室の流動的なコンテクスト(状況，文脈)を児童がどう捉え，そのことが児童の「登場人物の自己像・世界像」の語り直しに，どのような影響を与えているか，を明らかにするという課題が浮き彫りになった。

実験授業５では，「言論の場」の変化が「学習者の自己物語(自己像・世界像)」の語り直しに及ぼす効果を検討した。その結果，以下のことが示された。

1) 登場人物の内面を豊かに想像出来るようになり，「登場人物の世界像の語り直し」が起きること，
2) 「語り直された登場人物の世界像」あるいは，「新たに意味づけされた出来事」からイメージした「語られぬ」出来事をもとに，「自己物語」の語り直しが起きること

## 第5章 「語り直す力」を育てる文学の授業の構想

第５章の目的は，第４章の授業実践から得られた実践的な知見，及び，残された課題の考察を進め，「語り直す力」を育てる文学の授業を構想することであった。そのために，まず，「語り直す力」を育てる五つの過程，〈コミュニケーション過程〉における各学年の到達目標，及び，〈場・道具〉の発達段階に応じた配慮事項を示した。さらに，小学校の低学年では，「ニャーゴ」(２年)，中学年では，「おにたのぼうし」(３年)，高学年では，「海の命/いのち」を事例に，発達段階に応じた「語り直す力」を育てる文学の「授業モデル」を示した。

以下に，各学年の五つの過程，及び，〈コミュニケーション過程〉の到達目標を示す。

**【「語り直し」体験の到達目標】**

**「作品世界」の文学体験 ―語り直し1―**

1) 低学年 :①入る過程→②なる過程(他者理解)
2) 中学年(３年生) :①入る過程→②なる過程(他者理解)→③みる過程

**「現実世界」の体験 ―語り直し2―**

3) 中学年(４年生) :①入る過程 →②なる過程(他者理解)→③みる過程
「イメージ化」→④引き出す過程
4) 高学年 :①入る過程 →②なる過程(他者理解)→③みる過程
「イメージ化 →④引き出す過程 →⑤意味づける過程

**【コミュニケーション過程】**

低学年　：　**聴き合い型** → 問い返し型　→　振り返り型

「聴き合い型」の話し合いを中心，但し，２年生からは，「問い返し型」まで含む

中学年　：　**聴き合い型　→　問い返し型（対話的ディスカッション）**　→　振り返り型

「問い返し型」の話し合いを中心，但し，「振り返り型」まで含む

高学年　：　**聴き合い型　→　問い返し型（対話的ディスカッション）→　振り返り型**

「振り返り型」の話し合いが中心，　集団の状況モニタリングも含む

聴き合い型：同意や付加等の発話の繋がり(お互いの考えを受容し聴き合うという意味)

問い返し型：質問・反対等の発話の繋がり

振り返り型：修正(自分の考えの修正)・創造(新たな考えの生成)等の発話の繋がり

本論文の成果は，これまで「作品世界」の読みに偏りがちであった文学の授業に対して，「語り直す力」という概念を提示し，文学を日常に生かす道を示したこと，また，その「語り直す力」を育てる文学の授業の理論を提案し，低学年・中学年・高学年の発達段階に応じた具体的な授業モデルを示したこと，にある。「語り直す力」は，人がよりよく生きるための力になると考える。そのような「語り直す力」を育てる文学教育を示したことは，国語教育に貢献できるものと考える。

最後に，本研究に論じきれなかった課題について述べる。一つは，「中学・高校生における語り直す力の育成」についてである。研究における「語り直す力」を育てる文学の授業モデルは小学生を中心に構想している。「語り直す力」を直接的に必要とするのは，小学生よりもむしろ，中学・高校生以上といえよう。その点からも，早急に，「語り直す力」を育てる文学の授業の中学・高校生モデルを作る必要があろう。二つは，「語り直す力を育てる授業と読書教育」についてである。本研究は，「語り直す力」を育てるための文学教育に焦点を当て研究をしてきた。「語り直す力」を育成するためには，文学が適していると考えたからである。だが，第４章の実験授業では，文学作品(教科書教材)の「読み」に絞って論じられた。「語り直す力」の育成に読書教育はどう関わるのか，このような視点では論じられていない。三つに，教室の流動的なコンテクスト(状況，文脈)を児童がどう捉え，そのことが児童の「登場人物の自己像・世界像」の語り直しに，どのような影響を与えているか，を明らかにする。このような点を今後の課題としたい。

## 参考文献


秋葉英則（1989）思春期へのステップ：９，10歳を飛躍の節に．　清風堂書店，　大阪

秋田喜代美（2000）子どもをはぐくむ授業づくり．岩波書店，　東京

秋田喜代美，市川洋子，鈴木宏明（2002）授業における話し合い場面の記憶　―参加スタイルと記憶―．東京大学大学院教育学研究科紀要，42 ：　257-273

秋田喜代美，村瀬公胤，市川洋子（2004）中学校入学後の学習習慣の形成過程―基礎学力を支援する学校・家庭環境の検討．東京大学大学院教育学研究科紀要，43 ：205-233

アウグスチヌス(1976) 服部英次郎(訳)『告白(下)』　岩波書店　　東京

浅野智彦(2001) 自己への物語的接近　：家族療法から社会学へ　勁草書房　東京

朝倉　徹(1993)　　文学教育における「教師中心主義」--「中心人物」「主題」等を単一化する技術論とその発想を批判する　教育学雑誌　第２７号　41-54

芦田恵之助(1987) 古田拡他(編)　芦田恵之助国語教育全集　明治図書　東京

あまんきみこ（1969）いわさきちひろ（絵）『おにたのぼうし』　ポプラ社　東京

荒木繁(1953)　民族教育としての古典教育　―「万葉集」を中心にして―　『日本文学』　第２巻 9 号　1-10

荒木繁(1955) 文学教育について　『日本文学』　第４巻 9 号　30-35

荒木繁(1968)　古典教育の課題―　『民族教育としての古典教育』の再検討―　『日本文学』第 17 巻 12 号　59-76

荒木繁(1970)　文学教育の理論 明治図書　東京

有元秀文（2006）「国際的な読解力」を育てるための「相互交流のコミュニケーション」の授業改革．　渓水社,広島

幾田伸司(2011)　語られなかった状況を読むことの可能性　―物語テクストにおける登場人物の「不在」に着目して―　国語科教育　70　28-35

石井直人(2003) 児童文学と文学教育のつながりとずれ　日本文学　52(8)　57-65

石黒広昭(1998)　「心理学を実践から遠ざけるもの―個体能力主義の復興と破綻―」　佐伯胖、宮崎清孝、佐藤学、石黒広昭『心理学と教育実践の間で』東京大学出版会　103-156

五十嵐亮，丸野俊一（2008）　教室談話における「発言相互の繋がり」を可視化する分析方法の開発と適用．　日本教育工学雑誌，32 ：89-98

井関義久(1972)　『批評の文法―分析批評と文学教育』　大修館書店

井関義久(1984)　『国語教育の記号論―「批評の学習」による授業改革―　明治図書(後に，国語教育基本論文集成(1994)　第 12 巻　明治図書　に収録)

一柳智紀 (2009)　教師のリヴォイシングの相違が児童の聴くという行為と学習に与える影響. 教育心理学研究，57 ： 373-384

一柳智紀 (2007)「聴くことが苦手」な児童の一斉授業における聴くという行為―「対話」に関するバフチンの考察を手がかりに―. 教育方法学研究，33 ： 1-12

尹 東燦(2009)　文学の社会的機能について　教育研究フォーラム ： 学校法人タイケン学園研究グループ研究誌　1　50-54

ヴィゴツキー，L.S. 柴田義松(訳)(2001)『思考と言語』新読書社　東京

ウォルフガング・イーザー(1978) 轡田収(訳)(1982)　行為としての読書　岩波書店　東京

榎本博明(1999)〈私〉の心理学的探究　物語としての自己の視点から　有斐閣選書　東京

大河原忠蔵(1968) 状況認識の文学教育　有精堂

大河原忠蔵(1970)　状況認識の文学教育入門　明治図書

太田正夫(1987)『新版　想像力と文学教育　―十人十色を生かす文学教育』創樹社

太田正夫(1996)『十人十色を生かす文学教育　『ひかりごけ』の授業を中心に』三省堂

岡本夏木・池上貴美子・岡村佳子(訳)　ブルーナー, J.S.(2004) 岡本夏木・池上貴美子・岡村佳子(訳)　教育という文化　岩波書店　311

落合幸子(編著) (2000a) 小学三年生の心理　次へのステップアップ. 大日本図書，東京

落合幸子(編著) (2000b) 小学四年生の心理　十歳―二分の一成人式. 大日本図書，東京

垣内松三(1933) 実践解釈學考　不老閣書房　東京

柿　慶子，辻河昌登　(2008) 小学生の学校のライフサイクルに関する臨床心理学的研究. 学校教育学研究，20 ： 9-17

ガストン・バシュラール　宇佐見英治(訳)(1968) 空と夢　―運動の想像力にかんする試論―　法政大学出版局　東京

勝田　光(2011) 国語科における読みの社会的構成に関する一考察　-間テクスト性概念を用いた読者反応の分析を手がかりとして―　国語と教育　36 14-26

加藤直樹　(1987) 少年期の壁をこえる　―九，十歳の節を大切に―. 新日本出版社，東京

金子書房編集部(編集)(1952) 生活綴り方と作文教育　教育建設　第 3 号

鷹田佳典(2005) 死別研究における物語論の可能性と課題　―Neimeyer の「意味の再構築モデル」を

中心に―　法政大学大学院紀要　54 139-150
河合隼雄(2001)　心理臨床における「物語」の意義　精神療法　27,　3-7
川崎寿彦(1967) 分析批評入門　至文堂 東京
柄谷行人(1986)「探求Ⅰ」　講談社　東京
蔵内保明，船瀬安仁，山元悦子 (1998) 話し合いの能力の発達に関する研究　～同一課題による小学２・４年の授業分析を通して～．福岡教育大学紀要，47 ： 75-100
国分一太郎(1951) 新しい綴り方教室　日本評論社　東京
輿水　実(1966) 国語教育の近代化入門　明治図書　東京
小玉亮子(1996)「語らない子どもについて語るということ―教育「病理」現象と教育研究のアポリア」教育学研究　63(3)　286-293
小玉重夫(2010) 物語論の公共性に開くために　―主体の脱中心化へ向けて―　教育思想史学会第 19 回大会　フォ―ラム　31-36
小西甚一(1967)「分析批評の文献解題」　『国文学　解釈と鑑賞』５月　至文堂
小浜逸郎(2000)「なぜ人を殺してはいけないのか」　洋泉社　東京
小林敬一 (2002)　フロア・コントロールを介したリヴォイシング機会の取得，中学校における理科の授業を例として．　日本教育工学雑誌，26 ： 21-26
小松孝至・紺野智衣里・中條佐和子(2010)　児童期の自己の発達と正月高の教育実践　作文(綴方)・スピーチ活動の心理学的な意味づけ　　大阪教育大学紀要　第 59 1 号　81-95
西郷竹彦他(編)(1988)『分析批評による文学の授業の見直し|『文学教育基本論文集』第４巻　明治図書　東京
佐々原正樹，青木多寿子 (2012) 話し合いに「引用」を導入した授業の特徴　―小学４年生の談話分析を通して―．日本教育工学会論文誌，35(4) ：　331-343
佐々原正樹 (2013) 引用を導入した学級における「聴くこと・発言形成」に関わる方略の習得　―中学年の授業過程の事例的検討を通して―．日本教育工学　会論文誌，36(4) ：　375-391
佐々原正樹 (2013)「語り直す力」を育てる文学教育　―「語り」から「語り直し」へ―　広島大学大学院研究紀要　第一部(学習開発関連領域)　第 62 号　117-126
佐藤公治 (1996) 認知心理学からみた読みの世界 -対話と協同的学習を目指 して-.　北大路書房，京都
佐藤公治 (1999)　対話の中の学びと成長．金子書房，東京
佐貫　浩(2011)「新自由主義教育改革と学力観の転換―学力概念の批判的再構成へ」教育科学研究会

編『教育』第786号　国土社　71-79
ジェラルド・プリンス　遠藤健一(訳)(1991) 物語論辞典　松柏社　東京
渋谷孝・菅野朋子(1994) 鑑賞指導と分析批評・授業への応用　明治図書　東京
ジュリア・クリステヴァ(1969) 原田邦夫(訳)(1983)『記号の解体学セメイオチケ1』せりか書房　東京
ジョン・ケラー, 鈴木克明(監訳)(2010) 『学習意欲をデザインする　ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン』　北大路書房　京都
須貝千里(1999)　「遠く遠くの空へ向かふ」へ　－丹藤博文の「よだかの星」の実践を検討する―　日文協国語教育　NO 30　日本文学協会
須貝千里(2000)「『国語科教育法』での研究的模擬授業　全国国語教育学会　自由研究発表
須貝千里(2013)　「言葉ひとつ」、ふたたび　　鶴田清司と加藤典洋―　　日本文学　62(8)　13-27
菅原　稔(2009) 戦後生活綴り方(書くこと・作文)教育における「文章表現形体」論についての考察　岡山大学大学院教育学研究科集録　第141号　47-58
杉村靖彦(1999) 物語と自己の探究--物語的自己同一性をめぐって（秋季シンポジウム:「ポール・リクールの物語理論とその展開」）フランス哲学・思想研究（4), 68-83,
昌子佳広(2006)「教材『海の命(いのち)論　(2)：立松和平　「一人の海」との比較をもとに』　国語教育論叢　15　　27-39
昌子佳広（2013)　文学的文章教材における「挿絵」の機能とその活用に関する考察―言葉・挿絵間の「同一性」・「非同一性」に基づいて―　月刊国語教育研究　493, 50-57
鈴木啓子(2004)　『ごんぎつね』をどう読むか　日本文学　53(8)　pp. 30-40
住田　勝(2007)　ごっこ遊びから文学の読みへ　―入門期文学教材の分析を中心として―　月刊国語教育研究 419 46-51
住田　勝(2009) 初等教育入門期における物語の読みの学習指導　―「サラダでげんき」を軸として―　大阪教育大学国語教育講座　日本アジア言語　52 57-77
住田　勝(2011a)　小中連携国語科学習指導のために一考察　－物語教材の系統性の検討を通して―　第120回　全国大学国語教育学会　京都大会　自由研究発表資料
住田　勝(2011b)　物語教材の系統性に関する一考察　―「人物」と「場面」を手がかりとして―　第121回　全国大学国語教育学会　高知大会　自由研究発表資料
住田勝・山元隆治春・上田祐二・余郷勇次(2001)　文学作品の読みの能力の発達についての研究

〈つづき物語〉の分析を中心として　国語科教育　第 49 集　57-64
皇　紀夫(1999a)「人間形成の方法の問題　―臨床教育学との関連で」岡田渥美(編)『人間形成論　―教育学の再構築のために』　玉川大学出版部
皇　紀夫(1999b)「なぜ,〈臨床〉教育学なのか　―『問題』の所在と理解」和田修二(編)　『教育的日常の再構築』玉川大学出版部
荘島(涌井)幸子(2006)　自己物語論への《語り得ないもの》という視点導入の試み　心理学評論　48(4) 655-667
高垣マユミ，田爪宏二，清水　誠（2006）　理科授業の議論過程におけるトランザクティブディスカッションの生成を促す教師の介入方略.　教授学習心理学研究，　2 ：　23-33
高垣マユミ（2009）　認知的／社会的文脈を統合した学習環境のデザイン.　風間書房，　東京
高木まさき(2001)「他者」を発見する国語の授業　　大修館書店　東京
高橋美恵子(2009)「生きる力」の教育方法学的検討と実践への課題　関東学院大学文学部紀要　　第 116 号　127-148
高橋善彦(1978)「ごんぎつね」(四年）の実践群馬実践国語研究会。実践国語研究双書 1・言語力をつける読みの授業　明治図書 pp. 116-118
高森邦明(1975) 児童文学教材の研究 鳩の森書房　pp. 122-123
田近洵一(1975)『言語行動主体の形成―国語教育へ　の視座』　新光閣書店　東京
田近洵一(1990) 状況認識とその教育　国文　研究と教育　奈良教育大学　国文学会　第１３号
田近洵一(1999) 戦後国語教育問題史　大修館書店　東京
田島充士（2008）　再声化介入が概念理解の達成を促進する効果，バフチン理論の視点から.　教育心理学研究，　56　：　318-329
立木徹，伏見陽児(2008) 文学作品の誤った読み取りの修正　～「ごんぎつね」を取り上げて　茨城キリスト教 42　269-285
立松和平(1991)「一人の海」『jump novel』 集英社
立松和平(1992)　伊藤英子(絵)「海のいのち」ポプラ社
立松和平(1993)　「一人の海」『海鳴星』　集英社
田中 耕司 ，小田 真由美 ，山口 真希枝［他］(2005) 国語科における相互交流型授業の組織化に関する研究--学習過程の組織化が自己の読みの変容と他者の読みの受容に与える影響についての検討　読書科学　49(3)，91-102
田中昌人　(1987) 人間発達の理論. 青木書店，東京

田中実(2001) 「メタプロットを探る　「読み方・読まれ方」―『おにたのぼうし』を『ごんぎつね』と対照しながら―」　『文学の力　×　教材の力　小学校編３年』　東洋館出版社　8-22

田中実(2005)「これからの文学教育」はいかにして可能か　田中実，須貝千里(編著)「これからの文学教育」のゆくえ　右文書院　425-457

田中　実(2012)　「ポスト・モダンの〈読み方〉はいかにして拓かれるか　―あとがきに代えて―」　田中実・須貝千里(編)　『文学が教育にできること―「読むこと」の秘鑰―』331～341　教育出版

丹藤博文(1997)　「読むという葛藤　―『よだかの星」の実践―」　日本文学　NO 530

ダント，A.C. 河本英夫(訳) (1989)「物語としての歴史」　歴史分析哲学　国文社

土山和久，所　浩子，浜野智明，森知佐登，小村典夫，野中拓夫(2012) 文学の授業を活性化する言語活動の構築(1)　―実践論の基軸としての生産的方法―　大阪教育大学紀要　61 (1) 1-22

鶴田清司(2007) 〈解釈〉と〈分析〉に基づく文学教育論の構築―新しい解釈学理論を手がかりに―　早稲田大学　博士論文

寺田　守(2001) 読むことの学習に関する基礎的研究　-間テクスト性概念を手がかりにして―　教育学研究紀要　47(2)　76-81

寺田　守(2006) 読むことの学習において類似性に基づいた推論が果たす役割-間テクスト概念の検討を中心に―　国語の研究　32 31-41

鳶野克己(1994)　「『拠り所のなさ』という拠り所　―人間形成における『物語』の批判的再生のために」　加野芳正・矢野智司(編)　「教育のパラドックス/パラドックスの教育」東信堂　135-163

鳶野克己(1997) 「物語・教育・拠り所　―恫喝としての同一性」『近代教育フォ―ラム』第 6 号　教育思想史学会

鳶野克己(2003) 物語ることの内と外　物語的人間研究の教育学的核心　矢野智司・鳶野克己(編)(2003)『物語の臨界』「物語こと」の教育学 pp. 3-25 世織書房　神奈川

冨安 慎吾(2011)文学教材における読みの可能性についての検討 ： 立松和平「海のいのち/海の命」の場合　島根大学教育学部紀要. 教育科学・人文・社会科学・自然科学 44 別冊，43-54

中野登志美(2011) 文学教育における批評概念の史的検討　―ニュ・クリティシズム・分析批評を中心に―　　広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第 60 号

中村雄二郎(1992) 『臨床の知とは何か』　岩波書店　東京

滑川道夫(1977)　日本作文綴方教育史１　明治編　国土社

成田信子(2011)　「ごんぎつね」の教材価値論　―〈語り〉の態度―　第 120 回全国大学国語教育学会資料

難波博孝(1994)　コード解釈と推論解釈 ： 言語的側面から見た国語科の教育内容　全国大学国語教育学会発表要旨集 87 回　10-19

難波博孝(1999) 説明文学学習指導の基礎論的研究　―テクスト分析論・読解モデル論・言語発達論を中心に―　広島大学　博士論文

難波博孝・三原市立三原小学校(2007) PISA 型読解力にも対応できる　文学体験と対話による国語科授業づくり　明治図書　東京

難波博孝(2008)「母語教育という思想」世界思想社　京都

難波博孝(2009)　「国語教育とメタ認知」(現代のエスプリ　497)　至文堂

難波博孝(2010)　「論理/論証教育の思想(2)-論理の教育および論証の妥当性について―」　国語教育思想研究 (2) 21-29

難波博孝(2014)　読み聞かせ　――人舞台としての―　月刊国語教育研究　No.509 28-31

永田 麻詠(2009) 国語教育における自己観の考察 ： 新たな自己観の構築に向けて 国語教育思想研究 (1), 11-20

永田 麻詠(2011)　「エンパワメントとしての読解力に関する考察―キ―・コンピテンシ―の概念を手がかりに」　国語科教育　第 70 集　全国大学国語教育学会　68-75

西村拓生(2003)「臨床教育学」的授業研究の試み(１)　―大学と附属校園の協働のために―　人間文化研究科年報　(19) 281-296

布村育子(2008)　「『生きる力』の変容と教員養成の課題」埼玉学園大学紀要　人間学部編　8　107-117

野家啓一(2005)　「物語の哲学」　岩波書店　東京

野口裕二(2002)『物語としてのケア　-ナラティブ・アプローチの世界へ-』医学書院　東京

野口裕二(編) (2009)『ナラティブ・アプローチ』勁草書房 東京

野平慎二(2010)　生成と物語―語りと語り直しの可能　教育思想史学会第 19 回大会　フォ―ラム　15-30

濱田秀行(2010) 小説の読みの対話的な交流における「専有」 国語科教育　68　43-50

浜本純逸(1978)　戦後文学教育方法論史　明治図書　東京

浜本純逸(1993)「シンポジウム提案三　生涯学習時代の国語教育」, 国語科教育 第 40 集　全国大学

国語教育学会　30-40
林廣親(2001)　古い革袋に新しい酒は盛られたか　―立松和平「海の命」をめぐって―　田中実・須貝千里(編)(2001)　文学の力　×　教材の力　小学校編　６年　教育出版
バルト，R. 花輪光(訳)(1985)「記号学の冒険」みすず書房
ハロルド・グ―リシャン，ハ―レ―ン・アンダ―ソン(1992) 野口裕二，野村直樹(訳)(1997)「クライエントこそ専門家である」マクナミ―・ガーゲン(編)『ナラティブ・セラピー』金剛出版　東京
飛田多喜雄，野地潤家監修(1994)　国語教育基本論文集成１　明治図書　東京
飛田多喜雄(1977) 国語教育方法論史　明治図書　東京
平井啓之(1968)　疎外と文学　高橋和巳編　『文学のすすめ』 筑摩書房
ﾌｨｯｼｭ(1992)小林昌夫(訳)「このｸﾗｽにﾃｸｽﾄはありますか　解釈共同体の権威３」みすず書房
府川源一郎(1995)『文学すること・教育すること―　文学体験の成立をめざして―』東洋館出版社　東京
府川源一郎(2000)「『ごんぎつね』をめぐる謎」教育出版
藤村宣之，太田慶司 (2002) 算数授業は児童の方略をどのように変化させるか―数学的概念に関する方略変化のプロセス―. 教育心理学研究，50 ： 33-42
ブル―ナ―, J.S.(2004) 岡本夏木・池上貴美子・岡村佳子(訳)教育という文化　岩波書店　東京
ポ―ル・リク―ル　久米博(訳)(1987)　『時間と物語　Ⅰ』新曜社　東京
ポ―ル・リク―ル　久米博(訳)(1990)　『時間と物語　Ⅲ』新曜社　東京
マイケル・ホワイト，デビット・エプストン(1990)　小森康永(訳)(1992)　物語としての家族　金剛出版　東京
麻柄　啓一 (1994) 文学作品の読み誤りとその修正について　読書科学　38(1) pp.5-12
マクナミー，カーゲン(編)野口裕二，野村直樹(訳)　0(1997)「ナラティブ・セラピー」金剛出版　東京
間瀬茂夫，守田庸一，松友一雄，田中俊弥 (2007) 小学生の話し合い能力の発達に関する研究 ： 同一課題による調査を通した考察. 国語科教育，62 ： 67-74
松居　直(2000)「読んでもらうことの大切さ」　光村図書『国語教育相談室』 NO30
松尾純子(2010) 体験を語り始める　質的心理学研究　第９号　6-24
松下佳代(2010)「<新しい能力>概念と教育―その背景と系譜」　松下佳代編『<新しい能力>は教育を変えるか―学力・リテラシ―・コンピテンシ―』　ミネルヴァ書房　pp.1-42
松下佳代(2011「<新しい能力>による教育の変容―DeSeCo キ―・コンピテンシ―と PISA リテラシ―の検討―」日本労働研究雑誌　614 号　39-49

松橋俊輔(2013)　綴り方教授における「自己」への道
—樋口勘次郎の「自発活動」から芦田恵之助の「発動的態度」へ　東京大学大学院研究科
基礎教育学研究室　研究紀要　第 39　97-107
松本 修(2010) 読みの交流を促す「問い」の条件. 臨床教科教育学会誌, 10(1) : 75-82
松本 猛(1982)『絵本論　—新しい芸術表現の可能性を求めて—』　岩崎書店　東京
丸野俊一 (2002)　自己表現力と創造的・批判的思考を育むディスカッション教育に関する理論
的・実践的研究　平成11年度～平成13年度科学研究費補助金 代表・丸野俊一基礎研究 (A) 研
究成果報告書.
丸野俊一, 堀　憲一郎, 生田淳一(2002) ディスカッション過程での論証方とメタ認知的発話の分析
九州大学心理学研究　41 113-148
丸野俊一(2007a)　適応的なメタ認知をどう育むか　心理学評論　50(3)　341-355
丸野俊一(2007b)「心の働きを司る『核』としてのメタ認知」研究　—過去, 現在, 未来—　心理学
評論　50(3)　191-203
南　博文 (1991)　事例研究における厳密性と妥当性 ー鯨岡論文(1991)を受けてー.　発達心理
学研究, 2 : 46-47
ミハイル・バフチン, M. M. 新谷敬三郎, 佐々木寛,　伊東一郎(訳) (1988) ことば対話テクスト.
新時代社,　東京
ミハイル・バフチン, M. M. 桑野隆(訳) (1989) マルクス主義と言語哲学　～言語学における社
会学的方法の基本的問題～. 未来社, 東京
ミハイル・バフチン　望月哲男・鈴木淳一(訳)(1995)『ドストエフスキ—の詩学』　筑摩書房
ミハイル・バフチン, M. M. 伊東一郎(訳) (1996) 小説の言葉. 平凡社,　東京
宮西達也 (作・絵) (1997)　「にゃ—ご」　すずき出版　東京
宮野安治(1998)　戦後教育と子ども理解　—関係論の立場より—　教育哲学研究　77　41-46
向山洋一(1989) 分析批評で授業を変える　明治図書 東京
無着成恭(編)(1951)『山びこ学校』 青銅社
村上呂里(2004)「『おにたのぼうし』(あまんきみこ) 再読」日本文学　第53巻　第8号　20-29
村瀬公胤 (2005) 授業のディスコース分析, 教育研究のメソドロジ——学校参加型マインドへのいざない
—. 秋田喜代美, 恒吉僚子, 佐藤学編著　東京大学出版会, 東京,　pp.115-135
村松賢一 (2001)　対話能力を育む話すこと・聞くことの学習.　明治図書, 東京
宮嶋秀光(2010)「人格と『キ—・コンピテンシ—』教育の目標概念に及ぼすDeSeCoプロジェク

の影響について―」　名城大学学校つくり研究　2 41-56
毛利　猛(1996a)「『物語ること』と人間形成」　岡田渥美(編)　『人間形成論　―教育学の再構築のために』　玉川大学出版部
毛利　猛(1996b「教育のナラトロジ―」　和田修二(編)　『教育的日常の再構築』　玉川大学出版部
毛利　猛(2003) 教師のための物語論 矢野智司，鳶野克己(編)(2003)『物語の臨界』「物語ること」の教育学　pp. 29-53　世織書房　神奈川
本居宣長(1799)　『源氏物語玉の小櫛』
森美智代(2001)　「語られる身体」としての「聞くこと」　―「聞くこと」の学びの生成―　国語科教育　第 49 集　全国大学国語教育学会 65-72,
森美智代(2010)　高等教育における「言論の場」教育の探究　鈴峯女子短期大学人文社会科学研究集報　57　31-49
森美智代(2013)　文学体験に関する理論的検討 ： ルソーによる「解釈から証言へ」の移行に着目して〈論文〉　国語教育思想研究 (7)，42-50，2013-10-01
森本正一(1977)　自己変革に導く文学教育　黎明書房　名古屋
文部省(編)(1947) 昭和二十二年度小学校学習指導要領　国語科(試案)
文部省(編)(1951) 昭和二十六年改訂版小学校学習指導要領　国語科(試案)
文部科学省(2008) 中央教育審議会答申　「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」
矢野隆行(2008)「会話についての会話というシステム」　矢野隆行・田代　順　(編)『ナラティブからコミュニケーションへ　―リフレクティング・プロセスの実践』　3-21
矢野智司(2000a)　『自己変容という物語　―生成・贈与・教育』　金子書房　東京
矢野智司(2000b)　生成する自己はどのように物語るのか　―自伝の教育人間学序説―　やまだようこ (編)，人生を物語る―生成のライフストーリー　―，ミネルヴァ書房，251-278
やまだようこ(2000a) 喪失と生成のライフストーリー　―F1 ヒーロ―の死とファンの人生―　やまだようこ (編)，人生を物語る―生成のライフストーリー　―，ミネルヴァ書房，77-111
やまだようこ(2000b)「人生を物語ることの意味―ライフストーリーの心理学―」やまだようこ(編)，『人生を物語る―生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房，1-38　京都
やまだようこ(2000c)　人生を物語ることの意味―なぜライフストーリー研究か？―　教育心理学年報　39，146-161
やまだようこ(2006) 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念　―ナラティブターンと物語的自

己 心理学評論　49 N03　436-463
やまだようこ(2007a)　『喪失の語り　生成のライフストーリー』　　新曜社　東京
やまだようこ(2007b) 質的研究における対話的モデル構成法　―多重の現実,ナラティブ･テクスト,対話的省察性　　質的心理学研究　第6号　174-194
山元悦子（1996）対話能力の発達に関する研究 ～対話展開力を中心に～．国語科教育，43 ：39-49
山元悦子，稲田八穂（2008）コミュニケーション能力を育てる国語教室カリキュラムの開発　―発達特性をふまえたコミュニケーション能力把握に立って―．福岡教育大学紀要，57 ： 59-76
山元悦子，稲田八穂（2009）コミュニケーション能力の発達に関する研究　―小学５年生における認知・思考の発達特性―．福岡教育大学紀要，58 ： 113-128
山元悦子，稲田八穂（2010）小学校高学年の発達特性をふまえたコミュニケーション能力の育成に関する研究　福岡教育大学紀要　59　119-142
山元悦子,稲田八穂（2012）　小学校中学年の発達特性をふまえたコミュニケーション能力の育成に関する研究　　福岡教育大学研究紀要　61　： 109-125
山元悦子，松尾剛，若木常佳，稲田八穂，河野順子，幾田伸司，三浦和尚(2014) 小学生の話し合う力をどう見取るか　日本教科教育学会誌　37(1)　53-62
山本欣司(2005)　立松和平「海の命」を読む 日本文学教育　54巻　9号　53-61
山元隆春・住田勝(1996)　文学作品に対する子どもの反応の発達 ：「おにたのぼうし」の場合　国語科教育43集　60-69
山元隆春(1997)「あまんきみこ『おにたのぼうし』論」　広島大学学校教育学部紀要　第1部　第19巻　31-38
山元隆春（2002）コミュニケーション行為としての文学教育 ： 読書行為の三極構成に着目して　全国大学国語教育学会発表要旨集，103 ： 98-101
山元隆春(2011)　文学教育基礎論の構築―読者反応を核としたリテラシ―実践に向けて　渓水社　CD-ROM　改訂版　広島
山元隆春(2013)「絵本を使った理解方略指導の実際　―米国の事例を中心として―」　第123回 全国大学国語教育学会弘前大会自由研究発表資料
山元隆春(2014)「読解力」育成材としての絵本の有効性―Janet Evans 編(2009) Talking Beyond Page を手がかりにして―」　第126回全国大学国語教育学会　名古屋大会自由研究発表
萬屋秀雄(1983) 小学4年 ごんぎつね(新美南吉) 浜本純逸他編　作品別文学教育実践史事典　明治

図書　東京
ロナルド・D・レイン　笠原　嘉，塚本嘉壽(訳)(1973)　経験の政治学　みすず書房　東京
ロナルド・D・レイン　志貴春彦(訳)，笠原　嘉(訳)(1975)　自己と他者　みすず書房　東京
Anderson,R.C., Chinn, C., Chang, J., Waggoner, M., and YI, H.(1997) On the Logical integrity of children's arguments. *Cognition and Instruction*, 15 : 135-167
Anderson, T. ed(1991) *The Reflecting Team ; Dialogues and Dialogues about the dialogues*, Norton, 鈴木浩二 (監訳) (2001) リフレクティング・プロセス―会話における会話と会話，金剛出版　東京
Berkowitz, M. W., and Gibbs, J. C. (1983) Measuring the developmental features of moral discussion. *Merrill-Palmer Quarterly.* 29 : 399-410
Bransford, J. D., Brown, A. L. and Cocking, R. R. (1999) *How People Learn: Brain, Mind, Experience, and School.* Washington, DC : National Academy Press
Bruner, J. S. (1986) *Actual minds, possible works.* Harvard University Press. 田中一郎(訳)(1998) 可能世界の心理　みすず書房　東京
Bruner, J.S.(1990) *Acts of meaning.* Harvard University Press. 岡本夏木，仲渡一美，吉村啓子(訳)(1999)　『意味の復権　―フォ―クサイコロジ―向けて』　ミネルヴァ書房　京都
Bruner, J.S.(1997) The culture of education, Cambridge, MS.: Harvard University Pres 岡本夏木・池上貴美子・岡村佳子(訳)(2004) 教育という文化　岩波書店　東京
Butler,J.(2005) *Giving an Account of Oneself,* Fordham University Press 佐藤嘉幸・清水知子(訳)(2008)　「自分自身を説明すること」月曜社　東京
Cazden, C.B. (2001) *Classroom Discourse: The Language of Teaching and Learning* (2nd ed.). Portsmouth, NH : Heinemann
Charon R. (2006) *Narrative Medicine ; Honoring the stories of illness* . Oxford University Press.　斎藤清二他(訳)(2011)　『ナラティブ・メディスン』医学書院　東京
Connelly, F. M.& Clandinin,D. J.(1999) *Shaping a Professional Identity: Stories of Educational* Practice, New York : Teachers College Press.
Danto, A.C.(1965) Analytical Philosophy of History, The Cambridge Press, 河本英夫(訳)(1989) 『物語としての歴史　歴史の分析哲学』　国文社　東京
Evans, J. St. B. T. (1989) *Bias in Human Reasoning :Causes and Consequences.* Hove : Lawrence Erlbaum Associates.

Fernandez, M., Wegerif, R., Mercer, N. and Rojas-Drummond, S. M. (2001) Re-conceptualizing scaffolding and the Zone of Proximal Development in the context of symmetrical collaborative learning. *Journal of Classroom Interaction,* 36 : 40-54

FormanN, E. A., Larreamendy-Joerns, J., Stein, M. K. and Brown, C. A. (1998) "You're going to want to find out which and prove it" : Collective argumentation in a mathematics classroom. *Learning and Instruction ,* 8 : 527-548

Freeman, M. (1992) Self as narrative : the place of life history in studying the life span. In Brinthaupt T.M. & Lipka, R.P. (Eds.) T*he self : definitional and methodological issues* Albany State University Press. 15-43

Gergen, K. J. & Gergen, M. M. (1983) Narratives of the Self, In T.R. Sabin & K.E. Scheibe (Eds.), *Studies In Social Identity,* Praeger.

Gergen, K. J. & Gergen, M. M. (1984) *Historical Social Psychology*, Eaelbaum.

Goffman, E. (1974) *Frame Analysis*. Cambridge, MA : Harvard University Press

Goffman, E. (1981) *Forms of Talk.* Philadelphia : University of Pennsylvania Press

Goodwin, M. H. (1990) *He-Said-She-Said : Talk as Social Organization among Black Children.* Bloomington : Indiana University Press

Herrenkohl, L. R. and Guerra, M. (1998) Participant structures, scientific discourse, and student engagement in fourth grade. *Cognition and Instruction,* 16 : 431-473

Herrenkohl, L. R., PALINCSAR, A. S., DEWATER, L.S. and KAWASAKI, K. (1999) Developing scientific communities in classrooms: A sociocognitive approach. *The Journal of the Learning Sciences,,* 8 : 451-493

Johnson, R. T. , Johnson , D.W. and Holubec, E.J. (1993) *Circles of Learning : Cooperation in the Classroom (4th ed.) .* Interaction Book Company

Inagaki, K., Hatano, G. and Morita, E. (1998) Construction of mathematical knowledge through whole-class discussion. *Learning and Instruction*, 8(6) : 503-526

Kleinman A. (1988) *The Illness Narratives, Suffring Healing and The Human Condition.* Basic Books, Inc., New York 江口重幸, 五木田紳, 上野豪志(訳) (1996)病いの語り 誠信書房 東京

Kuhn, D. (1991) *The skills of argument.* Cambridge University Press, Cambridge, UK

Lampert, M. (2000) Knowing teaching : The intersection of research on teaching and qualitative research .

*Harvard Educational Review,* 70 (1) : 86-99

Mead,G.H. (1934) *Mind, Self, Society* The Univ. of Chicago Pr. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収(訳)(1973)『精神・自我・社会』 青木書店 東京

Means, M. L., and VOSS, J. F. (1996) Who reasons well? Two studies of informal reasoning among children of different grade, ability, and knowledge levels, *Cognition and Instruction*, 14 : 139-178

Mehan, H. (1979). *Learning Lessons*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Mercer, N. (1995) *The Guided Construction of Knowledge: Talk amongst teachers and learners.* Multilingual Matters LTD

Mercer, N. (1996) The quality of talk in children's collaborative activity in the classroom. *Learning and Instruction,* 6(4) : 359-377

Mink,L.O.(1974) History and as modes of comprehension , In Cohen, R.(ed.) *New Direction in Literary History* The Jhons Hopkins Univ. Press

Myerhoff,B.(1982) "Life history among the elderly : Performance,visibility and remembering" In Ruby,J.(Ed), *A Crack in The Mirror. Reflexive perspectives in anthropology.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Myerhoff,B.(1986) "Life not death in Venice : Its second life." In Turner, V. & Bruner,E.(Eds) *The Anthropology of Experience.* Chicago : University of Illinios Press.

Nisbett, R., & Ross, L. (1980) *Human Inference : Strategies and Shortcomings of Human Judgement.* Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.

O'connor, M.C. and MICHAELS, S. (1993) Aligning academic task participation status through revoicing : Analysis of a classroom discourse strategy. *Anthropology and Education Quarterly,* 24 : 318-335

O'connor, M.C. and MICHAELS, S. (1996) Shifting participant frameworks: Orchestrating thinking practices in group discussion. In D. Hicks(Ed.), *Discourse, Learning, and Schooling*(PP.63-103). New York: Cambridge University Press

Organisation for Economic Co-operation and Development(OECD)(2005) *The Definition and Selection of Key Competencies* : Executive Summary. D.S.ライチェン・L. H. サルガニク(編) 立田慶裕(監訳)(2006)「キー・コンピテンシー ―国際標準の学力をめざして」 明石書店 199-224

Palincsar,A.S., and BROWN,A.L. (1984) Reciprocal teaching of comprehension-fostering and

comprehension-monitoring activities. *Cognition and Instruction*, 1 : 117-175

Polkinghorne,D.E.(1988) *Narrative Knowledge and the Human Science.* New York, NY; State University of New York Press.

Propp,V.(1928/1968) Morphology of the Forktale. Austin,TX : University of TexasPress. 北岡誠司・福田美智代(訳)(1987)『昔話の形態学』 白馬書房

Rychen.D.S. & Salganik.I,H. (Eds) (2003) *Key competencies: For a successful life and a well -funtioning society .* Hogrefe & Huber 立田慶裕(監訳)(2006) 「キー・コンピテンシー―国際標準の学力をめざして」 明石書店 東京

Rogoff, B., and Toma, C. (1997) Shared thinking : Community and institutional variations. *Discourse Processes,* 23 : 471-497

Schank,G. & Abelson, P.(1995) Knowledge and memory : *The Realstory*, Lawrence Erlbaum Assoc Inc.

Schmidt, S.J.(1980) *GrundriB der Enpirischen Literaturwissenschaft,* Bd 1., Braunschweig 116-123

van Dijk,T. A. & Kintsch, W(1983). *Strateges of Discourse Comprehension.* New York : Academic Press

Wertsch, J. V. (1991) *Voices of the mind : A sociocultural Approach to mediated action.* Harvard University Press, Cambridge, MA (田島信元, 佐藤公治, 茂呂雄二, 上村佳世子(訳) 1995 心の声 ―媒介された行為への社会文化的アプローチ. 福村出版, 東京

Wertsch, J. V. and Toma, C. (1995) Discourse and Learning in the Classroom : A Sociocultural Approach. in L. P. Steffe and J. Gale (eds.), *Constructivism in Education*, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ pp.159-174

White, M. (1995) RE AUTHORING LIVES ; Interviews & Essays 小森康永・土岐篤史(訳)(2000) 人生の再著述者 マイケル, ナラティブ・セラピーを語る ヘルスワーク協会 東京

White, M.(1997) Narratives of Therapists Lives Dulwich Centre Publications 小森康永(訳) (2004) セラピストの人生という物語 金子書房 東京

White, M. (2007) *Maps of Narrative Practice* New York: Norton 小林康永(訳)(2009) ナラティブ実践地図 金剛出版 東京